教科書文庫
4
810
31-1929
2000301870

尋常小學

國語讀本

卷十

文部省

41371
教科書文庫
4
810
31-1929
2000301870

教科書文庫
4
810
31-1929
2000301870

尋常小學國語讀本 卷十

文部省

広島大学図書
2000301870

資料室

3759
M014

廣島縣山縣君戸河内町字打梨鈴政武所有
尋常五年生甲

目ろく

第一　明治神宮參拜……一
第二　アレクサンドル大王と醫師フィリップ……七
第三　道ぶしん……十一
第四　馬市見物……十六
第五　燈臺守の娘……二十四
第六　霧……二十九
第七　パナマ運河……三十
第八　開墾……三十七
第九　陶工柿右衞門……四十四
第十　銀行……五十
第十一　傳書鳩……五十三
第十二　鉢の木……五十九
第十三　京城の友から……七十二
第十四　炭坑……七十九
第十五　輸出入……八十五
第十六　登校の道……八十九
第十七　言ひにくい言葉……九十一
第十八　文天祥……九十六
第十九　溫室の中……百
第二十　手紙……百六
第二十一　日光山……百十
第二十二　捕鯨船……百十二
第二十三　太宰府まうで……百十六
第二十四　たしかな保證……百二十一
第二十五　平和なる村……百二十四
第二十六　進水式……百二十七
第二十七　兒島高德……百三十

廣島大學圖書之印
廣島大學圖書之印
廣島大學 教 18271 圖書

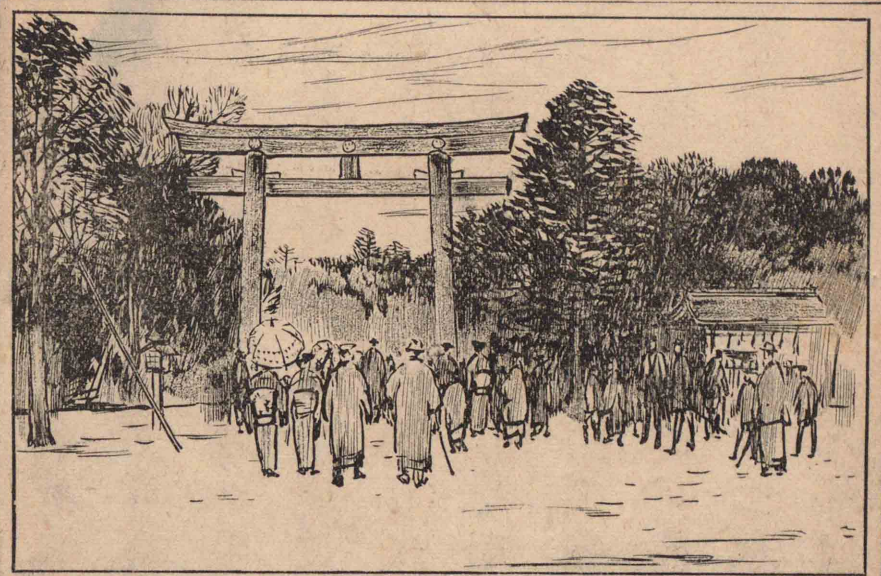
廣島大學圖書之印

第一　明治神宮參拜

十月十二日、我等五年生一同は、河井先生にみちびかれて、東京代々木の明治神宮に參拜せり。

青山の神宮前停留場にて電車を下り、廣き參道を行くこと十町ばかりにして神宮橋に達す。橋を渡り、大鳥居をくゞりて南參道に入る。兩がはに木立すき間もなく茂りて、新しき宮の境内とは思はれず。左に折れて第二の鳥居を過ぎ、又右に折れて第三の鳥居の前に出づ。水屋の水に手を清め口をすすぎて南神門を入れば、拜殿・廻廊（くわいらう）など總べて白木

神　奉　后



造にて、神々しさたとへん方なし。拜殿の前に進みて整列し、謹みて拜し奉る。明治天皇・昭憲皇太后、御二方のおぼしたまとこしへに此所にしづまりましますよと思へば、かしこさ殊に身にしみておぼゆ。

先生の説明によれば、當社の用材は主として木曽産

好　到遺　舊(旧)　何世

の檜なりとぞ。又日々に奉る供へ物には、御生前殊に御好みありし品々を選ぶ由なるが、それらの品を社務所にたづさへ來て、神前にさゝげたしと願ひ出づる者數多しといふ。

寶物殿に到りて御遺物を拜觀す。平生きはめて御質素にわたらせられし御有樣、一つ〳〵の御品の上にうかゞはれて、無量の感に打たれたり。

それより社務所に行き、舊御殿・舊御苑の拜觀を願ふ。何れも、御在世中しば〳〵行幸・行啓ありし所にて、當時の御殿・御庭などの、今も其のまゝに保存せ

彼所

思

らるゝなりとぞ。案内の人にみちびかれて、まづ社務所の隣なる舊御殿を拜觀す。御殿は質素なる平屋にて、御庭の此所彼所に、下葉の色づきかけたるはぎ茂れり。はぎの御茶屋といふ名のあるも之がためなるべし。此所を出でて舊御苑に入り、木立の間の細道をたどれば、程なく小さき建物の前に出づ。名を隔雲亭といふ由なり。前には横長き池をひかへ、池のめぐりは見渡す限りの木立くさむらにて、さながら別天地に遊ぶ思あり。昔の武藏野の姿を此所に殘さんとの皇太后の思召のまゝに、今も

新

坪

人工を加へずといふ。

舊御苑を出でて北參道より歸る。途中、先生は「此の境内は廣さ約二十二萬坪。舊御苑と舊御殿の邊とをのぞきては、立木きはめて少かりしかば、新に植込みたる木の數、實に十萬餘本に及べり。大

明治神宮神域略圖

盡（尽）　扱　半團

方は國民の眞心こめたる獻木（けんぼく）にて、中には小學生の奉りたるものも少からず。種類は大てい我が國に産する限りを盡くし、産地は日本全國にわたれり。臺灣・樺太（からふと）など、遠方より送り來れるもあれば、枯損ずるもの多かるべきに、ほとんど皆勢よく根づきたるは、誠に驚くべき事ならずや。ひつきやう（ママ）掘取る者、運ぶ者、植込む者、一樣に心を盡くして、大切に取扱ひたるによるならん。又御造營の半ば頃より、各地方青年團の御手つだひを願ひ出づる者數多かりしかば、何れも十

位　征　建設

日間を限りて土木（どぼく）に從事せしめたるに、通常の人夫にもまさりて仕事ははか取りたりと聞く。これも眞心の致す所なるべし。」

と語られたり。

第二　アレクサンドル大王と醫師フィリップ

昔ヨーロッパにアレクサンドル大王といふ王があつた。マケドニヤといふ小さな國の王子と生れ、二十一で位につき、わづか十數年の間に四方の國々を征服して、當時世界に類のない大國を建設した英雄である。

冷

其の大王が東方諸國の遠征に出かけた時の事である。或日王は部下の精兵を引連れ、燒けつくやうに熱い平原を横ぎつて、タルススといふ町に着いた。全身砂ぼこりにまみれた王は、町はづれを流れてゐるきれいな川にはいつて水浴をした。水は意外に冷たくて、まるで氷のやうであつた。

此の水浴が體にさはつたものか、王は俄にはげしい熱病にかゝつた。陣頭に立つては百萬の敵を物とも思はぬ英雄も、病氣は如何ともすることが出來ない。ようだいは時々刻々に惡くなつて行く。醫

投殺　經　調　賴　密

師は皆、投藥してもし萬一の事があれば、毒殺のうたがひを受けはしないかと恐れて、たゞ經過を見守つてゐるばかりである。

此の有樣を見て、フィリップといふ醫師が、一命をなげうつても王を助けようと決心した。方法は或劇藥を用ひる外になかつたので、フィリップは眞心こめて此の事を申し出た。王はこゝろよく之を許した。

フィリップが藥を調合しに別室へ退いた後へ、王の日頃信賴してゐるパルメニオ將軍から、王にあてた密書が屆いた。それにはフィリップが敵から大金をも

終

らふ約束で王を毒殺しようとしてゐるといふ風説があるから、用心するやうにと書いてあつた。王は讀終つて、そつと手紙をまくらの下へ入れた。

程なくフィリップは病室にはいつて來て、うやうしく藥のコップを王にさゝげた。王は片手にそれを受取り、片手にかの密書を取出して、靜かにフィリップに渡した。

然

興奮眼

一口又一口、平然と藥を飲む王、一行又一行、おそれと興奮に眼かゞやくフィリップ。

やがて讀終つたフィリップが、眞青な顔をして王を見上げると、王は信頼の情を面にあらはして、フィリップを見下してゐた。

面

王は間もなく健康を回復して、再び其の英姿を陣頭にあらはす事が出來た。

第三　道ぶしん

十月二十五日は、青年團の道ぶしんの日であつた。團員は、午前七時八幡神社の境内に集つた。總員三十二人が四組に分れて、それ〴〵仕事の持場に向つた。

午後四時、豫定の仕事を終へて、再び境内に集つた。

育

熱い番茶にのどをうるほして休んでゐる所へ、此の頃墓參りのために朝鮮から歸つてをられる高橋さんが來られた。高橋さんは、あちらで長らく教育に從事してゐる人である。

「やあ、皆さん御苦勞ですね。今通つて見て來ましたが、大そうりつぱになりました。よくこんなに早く出來ましたね。どれ、私もお茶を一つ御ちそうになりませう。」

誰かが力石をころがして來て、土をはらつて高橋さんの爲に席を作つた。高橋さんは、すぐ前に居る

順太郎君を見て、

「あなたもずゐぶん大きくなりましたね。おとうさんの若い時そつくりです。私も、あなたのおとうさんなどと一しよに、よく道ぶしんに出たものでした。」

高橋さんは、お茶を一口飲んで、

「郷里の青年諸君がこんなにまじめになつて來たのは、何よりうれしい事です。私どもの若い時分には、かういふ仕事になると、あなた方の半分ぐらゐしか働きませんでした。朝のかゝりはお

そいし、晩のしまひは早い上に、とかく無責任な事ばかりしてゐました。そんな風でしたから、ぼんの道ぶしんなどは、何時も二日はかゝつたものでした。皆さんの前に立つと、其の頃の心掛が恥づかしくてなりません。

私が今度歸つて來て、はじめて青年團の規約を見た時は、其のとゝのつてゐるのに驚いて、これがまじめに實行されてゐるかどうかと、少し氣になつたのでした。しかし、此の間夜學を參觀した時の皆さんの熱心な樣子や、今日の働を見て、

歌

大そう心強くなりました。私は此の村の青年諸君が、かうして修養にも實行にも、骨を折つてをられるのを、うれしく思ひます。

朝鮮の青年も、近頃はなかなか頭が進んで來ましたので、あちらの教育に關係してゐる私どもは、非常に喜んでをります。それにつけても、諸君にも大いに奮發していたゞきたいのです。」

高橋さんの熱心な話は、それからそれへと續いて、團員に強い感動をあたへた。やがて暮近くなつたので、一同は元氣よく團歌を歌ひながら、夕日を浴

久市

びて歸途についた。

第四　馬市見物

宮本の伯父様の所に着いたのは昨夜七時でした。久々で皆様といろ〳〵お話をして、非常に愉快(ゆ)でした。ちやうど此の頃、此所の名物の馬市が始つてゐるといふので、今日は朝から、義雄君に案内してもらつて見物に行きました。

だん〳〵市場に近づくと、本通も横町も皆馬でいつぱいです。なれない私は、大丈

危險向

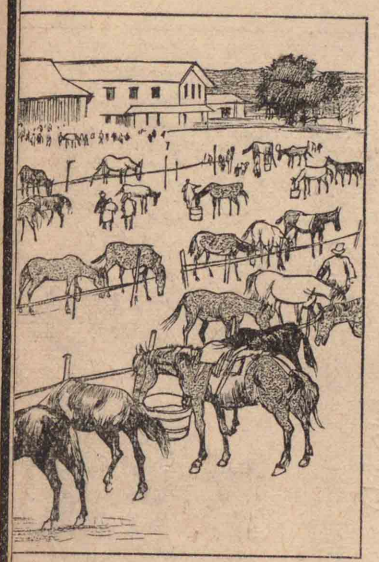
周圍無

夫といはれても、やはり馬のそばを通るのが危險なやうな氣がしてならなかつたが、土地の人は一向平氣で、三四歳の子供でも、腹の下などを自由にくゞつて歩きます。馬も誠に從順(ジヨウジユン)で、けたりかみついたりするやうな事は決してしません。

市場は町はづれにあります。廣さは二町四方ぐらゐで、せり場を中央にして、其の周圍(注イ)は馬つなぎ場になつてゐます。私の行つた時には、もう其所にすき間も無く

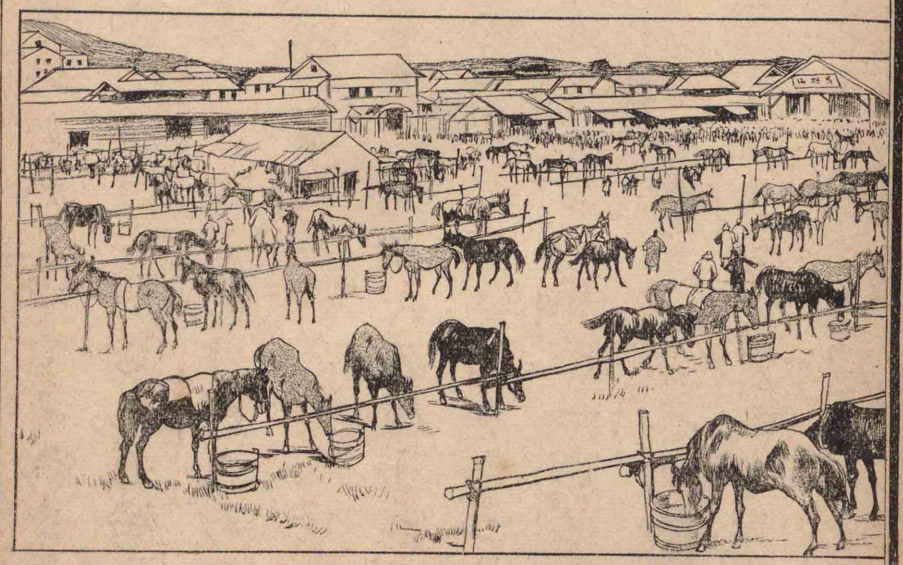
族

子馬がつないでありました。皆二歳駒だ
さうです。まだせりが始るのに間がある
といふので、馬つなぎ場を見て廻つたが、
どの子馬も皆かはいらしい顔をして、お
となしくつながれてゐます。中には、母馬
がつきそつて來てゐるのもたくさんに
あります。



子馬には大てい
飼主の一家族が
ついて來て、親切

背



に世話をしてゐ
ます。中には、君ぐ
らゐの子供や、其
のおかあさんら
しい人が、今日の
別れを惜しんで、
泣きながら豆や
にんじんをやつ
たり、くびや背を
なでたりしてゐ

るのもあります。それを見ると、成程、こんなにかはいがられて居れば、馬も従順（ジヤウジユン）で人になつくわけだと、しみ〴〵思ひました。

せりの始つたのは十時頃でした。せり場の一方に高い臺があつて、其の上に掛の人が居る。子馬が一頭づつ中央の廣場に引出されると、黒山のやうに集つてゐる買手は、自分の見込で思ひ〳〵の直をつけて、次第にせり上げる。其の間、買手の競

直

争する聲と掛の人の聲と入亂れて、非常ににぎやかです。さうして、もうこれが最（サイ）高の直（ネ）だと見ると、掛の人が其の直で賣渡すといふあひづに手を打つて、取引が成立（なり）ちます。

取引の成立つた馬は、其の日の中に買手に引渡されてしまひます。二年の年月苦労して育てて來たものが、急に見ず知らずの人の手に渡つてしまふのだから、飼主が泣いて別れを惜しむのも、もつとも

買段圓

な事です。

此の町では、二歳駒の市が十日間も續いて、其の間には千頭からの賣買があり、直段も一頭四千圓・五千圓といふ高いのがあるさうです。これ等の馬が日本全國に散らばつて、或は軍馬になり、或は馬車馬になり、或は耕馬になるのださうです。私は今日此所に來て、飼主たちがあんなにかはいがつてゐたのを見て、此の子馬共を買つた人たちも、どうか同じやうにや

處(処)

さしく扱つてくれゝばよいと、心からいのりました。

歸りに散歩がてら町を歩いて見ると、賣つてゐる菓子もおもちやも、多くは馬にちなんだ物で、店の看板にも馬がかいてあるのがよく目につきました。成程、此の邊は馬でもつてゐる處だと思ひました。別封の繪葉書も歸りに買つたのです。市場の様子がよくわかるから、引合はせて見て下さい。

嵐

十一月二日　兄から

信吉どの

第五　燈臺守の娘

英國の東海岸にロングストーンといふ島がある。其の一角にそびえてゐる燈臺に、年とつた燈臺守が、妻と娘と三人で、わびしく其の日を送つて居た。波風の外には友とするものもない此の島で、老夫婦のなぐさめとなるものは、氣だてのやさしい一人娘のグレースダーリングであつた。

或秋の夜の事である。一そうの船が、俄の嵐におそ

はれて、此の島に近い岩に乗上げた。船は二つにくだけて、船尾の方は見る〳〵大波にさらはれてしまつた。岩の上に残つた船體には、十人許の船員がすがり附いて、聲を限りに救を求めたが、何のかひもなかつた。

夜がほの〴〵と明けた頃、荒れくるふ海上を見渡したグレース親子は、ふとはるかの沖合に、かの難破船を見とめた。娘は驚いて、

「まあ、かはいさうに。おとうさん、早く助けに行きませう。早く〳〵」。

遂

「あの波を御らん。かはいさうだが、とても人間業では救へない。」

「私は、とても人の死ぬのをじつと見ては居られません。さあ、行きませう。命を捨ててかゝつたら、救へないことはありますまい。」

此のけなげな言葉は遂に父を動かした。二人は早速ボートを出す支度に取りかゝつた。

やがてボートは岸をはなれた。打返す磯波にまき込まれたかと思へば、忽ち大波にゆり上げ、ゆり下げられながら、沖へ〳〵とつき進む。親子は死力を

附　漕

呑

退

盡くして漕ぎに漕いだ。岩の附近は波がいよ〳〵荒れくるふ。打ちよせる大波、打返すさか波、危く岩に打付けられ、忽ち死の口に呑まれようとする。一進一退、たゞ運を天にまかせて、二人はボートをあやつつた。

からうじてボートはかの難破船にたどり着いた。生残つた船員は涙を流して喜んだ。親子は

注　浪　再名殘

非常な危險をかして、人々をボートに收容し、又あらん限りの力をオールに注いで、我が家へと向つた。つかれ果てた人々も、親子の勇ましい働にはげまされて、我もく〳〵と力をそへる。かうしてボートは再び荒波を切りぬけて、燈臺に歸り着いたのである。

二日たつて、天氣も晴れ、波浪もをさまつた。グレースの眞心こめた看護によつて、全く元氣を回復した人々は、親子にあつく再生の恩を謝し、名殘を惜しんで此の島を去つた。

爲畫(画)　輪路影

今まで人にも知られなかつた燈臺守の娘グレースダーリングの名は、程なく國の内外に傳はつた。娘の勇ましい行爲は、歌に歌はれ、其の肖像畫は到る處の店頭に飾られた。

第六　霧

しらぐと、朝霧　野山をこめて、
月のごと、日輪　ほのかに浮ぶ。
野路を行く人影　たゞちにきえて、
けたゝまし、もずの音、こずゑはいづこ。
谷間よりはひ出で、木の幹ぬらし、

笛寄

しらぐ〜と、おぼろに　朝霧流る。

しめやかに、夜の霧　ちまたをつゝみ、
立並ぶ家々、　ともしびうるむ。
影のごと、人去り　人來る大路、
ほろ〜と聞ゆる　笛の音いづこ。
窓ぎはにはひ寄り、　ガラス戸ぬらし、
しめやかに、ひそかに　夜の霧流る。

第七　パナマ運河

北アメリカが南アメリカに續く部分は、パナマ地

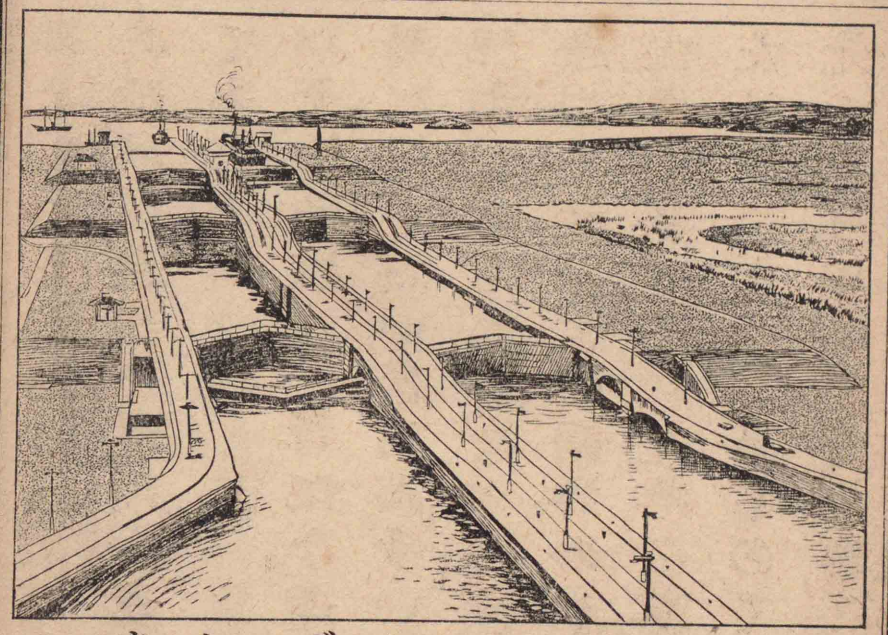
形　伏層岩割到

峡（けふ）といつて、地形がきはめて細長くなつてゐる。此の地峡に造つた運河が、世界に名高いパナマ運河である。

パナマ地峡は一帶に小山が起伏してゐる上に、地層にはかたい岩石が多い。其の外にもいろ〜の理由があるので、此の地峡を切通し、平かな掘割を造つて、太平・大西兩洋の水を通はせることは到底出來ぬ事であつた。そこで此の運河は、非常に變つた仕組に出來てゐるのである。

先づ地峡の山地を流れてゐる河の水をせき止め

結



て、湖を二つ造つた。高い土地の上に水をたゝへたのであるから、湖の水面は海面よりずつと高い。此の湖へ兩方の海から掘割が通じてある。所で、此の高い湖と低い掘割を何の仕掛もなしに連結すれば、湖の水は瀧のやうに掘割へ落込んで、とても船を通すことは出來ないから、掘割の處處に水門を設けて、たくみに船を上下する樣にしてある。

設

今太平洋の方から此の運河を通るとする。船は先づ海から廣い掘割にはいる。しばらく進むと水門があつて、行くてをさへぎつてゐる。近づくと、門の戸びらは左右に開いて、船が中にはいり、戸びらはしまる。上手にも水門があるので、船は大きな箱の中に浮いてゐる形である。底の水道から水がわき出て、船は次第に高く浮上る。と、上手の水門が開い

湖

て、船は次の箱の中へはいる。前と同じ方法で、船はもう一段高く浮上り、次の水門を越して、小さい人造湖に出る。此の湖を横ぎると又水門があつて、船はさらに一段高くなる。かうして前後三段に上つた船は、海面より約二十六メートルも高い水面に浮ぶのである。

それから船はクレブラの掘割

此處　浦　凡

を通る。これは高い山地を切通したもので、此處を切通すのは非常な難工事であつたといふ事である。掘割を通過して船は又湖に出る。ガツン湖といつて、廣さが霞(かすみ)が浦の二倍以上もある大きな人造湖で、湖上に點々と散在してゐる島々は、もと此處にそびえてゐた山々である。此の湖を渡つて又水門を通過する。今度は前と反對に、順次に三段を下つて、海と同じ水面に浮ぶ。此處から又掘割を走つて、終に洋々たる大西洋に出るのである。運河は全長五十哩餘り、凡そ十時間前後で之を航すること

畫
億
費
應

が出來る。

パナマ地峽に運河を造る事は、數百年來ヨーロッパ人のしば〳〵計畫したところで、實地に大仕掛の工事を行つた事もあつたが、成功を見るに至らなかつた。最後にアメリカ合衆國は、國家事業として此の工事に着手し、十年の歲月と八億圓の費用とを費して、我が大正三年、遂に之を造り上げたのである。

米國が此の運河を造るに成功したのは、主として、最新の學理を應用したからであつた。衞生の設備

文

をよくして危險な病氣を根絶し、幾萬の從業者の健康をはかつた事や、ほとんどあらゆる文明の利器を運用して、山をくづし、地をうがち、河水をせき止めた事など、一としてそれならぬものは無い。

昔、太平・大西兩洋の間を往來する船は、はるか南アメリカの南端を大廻りしなければならなかつた。しかしパナマ運河の開通以來は、此の不便が無くなり、したがつて世界の航路に大きな變動を生じたのである。

第八　開墾

村はづれにある、うちの雜木山を開墾し始めてから、もう一月餘りになる。父は毎日、兄や木びきの力藏さんと、朝早くから行つて、夕方おそくまで働いてゐる。今日は私もついて行つて見た。

かり取つた雜木、切倒した大木、掘起した木の根や石ころ、まだあらごなしの開墾地は、まるで足のふみ場も無い有樣である。私は思はず、

「やあ、すつかり變つた。」

と聲をあげると、兄は

「うん、これが四十日間の汗のたまものさ。」

といつて、かついで來たつるはしを下へ置いた。

地面は霜で眞白である。あたりは如何にも靜かで、たまに散る落葉の音が、かさり〳〵と聞える。兄はそこらに散らばつてゐる木の根や、小枝などを拾ひ集めて來て、たき火を始めた。父は腰から鎌をぬきながら、

「あゝ、今朝はなかなか寒い。指の先がしびれるやうだ。」

といつて、たき火のそばの切りかぶに腰を下し、鎌をとぎにかゝつた。力藏さんも、

「しかし天氣が續いてよいあんばいだ。」
と誰に言ふともなく言つて、昨日からひきかけてゐるけやきの大木を、大のこぎりでひき始めた。父は
「力藏さんまあ、一服やつてから始めなさい。」
といつたが、力藏さんは見向きもせずに、元氣な聲で、
「朝のうちに此のけやきだけぶつ倒したいと思つてね。」
と答へて、止めようともしないずいこくといふ

のこぎりの音が、あたりの靜かさを破る。
向ふの山の頂に日の光が赤々とさして來た。何處からか、ほがらかなひよどりの聲が聞える。やがて父は、鎌を手にして雜木のやぶへはいつて行つた。
兄は私に
「壯吉、お前はおとうさんのかつた雜木を、かういふ風に束ねて運んでくれ。」
といひながら、生木の枝で雜木を束ねて見せた。さうして兄は腰の手ぬぐひを取つて鉢まきにし、父のかり取つたあとを元氣よくつるはしで掘返し

始めた。私は教へられた通り、雜木を束ねては運び、運んでは又束ねて、精一ぱいに働いた。

しばらくの間めい〳〵がこんな風に働いてゐると、谷向ふのくさむらの中からけたゝましい羽ばたきの音を立てて、山鳥が一羽飛立つた。同時に獵(れふ)

銃の音が續けざまに二發聞えた。日は大分高くなつてさわやかにかゞやき、高い〳〵青空を、ひわの一群が身輕さうに飛んで行く。

父は

「かうしてみんな手をそろへて働けば、來年の秋はもう眞白な蕎麥(そば)の花で、此の地面が埋まつてしまふのだ。」

と樂しさうに言つた。

かる、切る、掘る、運ぶ、誰も彼も一心不亂に働くので、仕事は豫想以上にはかどり、九時頃にはもう數坪

の地面が新しく開かれた。力藏さんのひいてゐたけやきの大木も、見事に根本から切倒された。

第九　陶工柿右衛門

窯場から出て來た喜三右衛門は、緣先に腰を下して、つかれた體を休めた。日はもう西にかたむいてゐる。ふと見上げると、庭の柿の木には、すゞなりになつた實が夕日を浴びて、珊瑚珠のやうにかゞやいてゐる。喜三右衛門は餘りの美しさにうつとりと見とれてゐたが、やがて

「あゝ、きれいだ。あの色をどうかして出したいもの

のだ。」

とつぶやきながら、又窯場の方へとつて返した。日頃から自然の色にあこがれてゐた彼は、目のさめるやうな柿の色の美しさに打たれて、もう立つても居ても居られなくなつたのである。

喜三右衛門は、其の日から赤色の燒付に熱中した。

困

しかしいくら工夫をこらしても、目ざす柿の色の美しさは出て來ない。毎日燒いてはくだき、燒いてはくだきして、歎息する彼の樣子は、實に見る目もいたましい程であつた。

困難はそればかりで無かつた。研究の爲には、少からぬ費用もかゝる。工夫にばかり心をうばはれては、とかく家業もおろそかになる。一年と過ぎ二年とたつうちに、其の日の暮しにも困るやうになつた。弟子たちも此の主人を見限つて、一人逃げ二人逃げ、今は手助する人さへも無くなつた。喜三右衛

罵唯

門はそれでも研究を止めようとしない。人は此の有樣を見て、たはけとあざけり、氣ちがひと罵つたが、少しもとんぢやくしない。彼の頭の中にあるものは、唯夕日を浴びた柿の色であつた。

かうして五六年はたつた。或日の夕方、喜三右衛門はあわたゞしく窯場から走り出た。

「薪は無いか。薪は無いか」

彼は氣がくるつた樣にそこらをかけ廻つた。さうして手當り次第に、何でもひつつかんで行つては窯の中へ投込んだ。

離雞

喜三右衛門は、血走つた目を見張つて、しばらく火の色を見つめてゐたが、やがて「よし。」と叫んで火を止めた。

其の夜喜三右衛門は窯の前を離れないで、もどかしさうに夜の明けるのを待つてゐた。一番雞の聲を聞いてからは、もうじつとしては居られない。胸ををどらせながら窯のまはりをぐるぐる廻つた。いよ〳〵夜が明けた。彼はふるへる足をふみしめて窯をあけにかゝつた。朝日のさわやかな光が、木立をもれて窯場にさし込んだ。喜三右衛門は、一つ

皿

又一つと窯から皿を出してゐたが、不意に「これだ。」と大聲をあげた。

「出來たく。」

皿をさゝげた喜三右衛門は、こをどりして喜んだ。

尚巧

かうして柿の色を出す事に成功した喜三右衛門は、程なく名を柿右衛門と改めた。

柿右衛門は今から三百年ばかり前、肥前の有田にゐた陶工である。彼は此の後も尚研究に研究を重ね、工夫に工夫を積んで、世に柿右衛門風といはれる精巧な陶器を製作するに至つた。柿右衛門はひ

とり我が國内において古今の名工とたゝへられてゐるばかりでなく、其の名は遠く西洋諸國にまで聞えてゐる。

第十　銀行

預

「おとうさん、今度役場の隣にりつぱな建物が出來ましたね。あれは何ですか。」

「あれは銀行だよ。今までは横町の小さい家だつたが、今度はあゝいふりつぱなのを建てたのだ。」

「銀行といへば、おとうさんは、何時かも銀行へ行つてお金を預けて來るとおつしやいましたね。銀行

預

はお金を預ける處ですか。」

「まあ、さうだね。」

「一體、なぜお金を預けるのですか。」

「お金といふものは、うちにしまつて置くものではない。うちに置くと、火事にあつたり、盜人に取られたりする危險があるからね。さうで無くても、餘分のお金があると、ついむだな事に使つてしまふ。だから、少しでも餘つたお金があつたら必ず預金にして置くものだ。」

「預けたお金は何時でも返してもらへますか。」

期限

「銀行の預金には定期預金といふのと當座預金といふのがある。當座の方は何時でも引出すことが出來るが、定期の方は、預けた日から半年とか一年とかきまつた期限が來ないと引出すことが出來ない。」

「それでは當座預金の方が便利ですね。」

「便利だが、その代り利子が安い。定期の方には利子がずつと多く附く。だから當分使ふ見込のない、まとまつたお金は定期預金にした方がよいのだ。」

「一體、銀行は人からお金を預つてそれをどうするのですか。大勢の人に利子を拂ふだけでは、銀行が損をしないでせうか。」

拂(払)

「世の中にはお金の有餘つてゐる人もあるが、又何か事業を起さうと思つてゐる人で、お金のない人がある。銀行は有餘つてゐる人からお金を預つて、資金の足らぬ人に貸附けるのだ。貸附の利子は預金の利子より高くしてあるから、其の差だけが銀行の收入になるのだ。」

貸差

「成程、うまく出來たものですね。」

第十一　傳書鳩

玉
羽毛

寶玉をちりばめたやうなかはいゝ目、紅をさしたかと思はれるやさしいくちばし、美しい羽毛に包まれた圓い胸、鳩は見るからに愛らしいものである。此の愛らしい小鳥が、他の方法では全く通信が出來なくなつた場合でも、いろ〳〵の困難をかして、遠い處まで使者の役目を務めると聞いては、誰でも驚かない者はあるまい。

鳩を通信に使つたのは、餘程古い時代からの事で、殊に一時は非常に盛に行はれたが、無線電信などが發明せられて以來、自然輕んぜられるやうにな

證
飼
勵
普

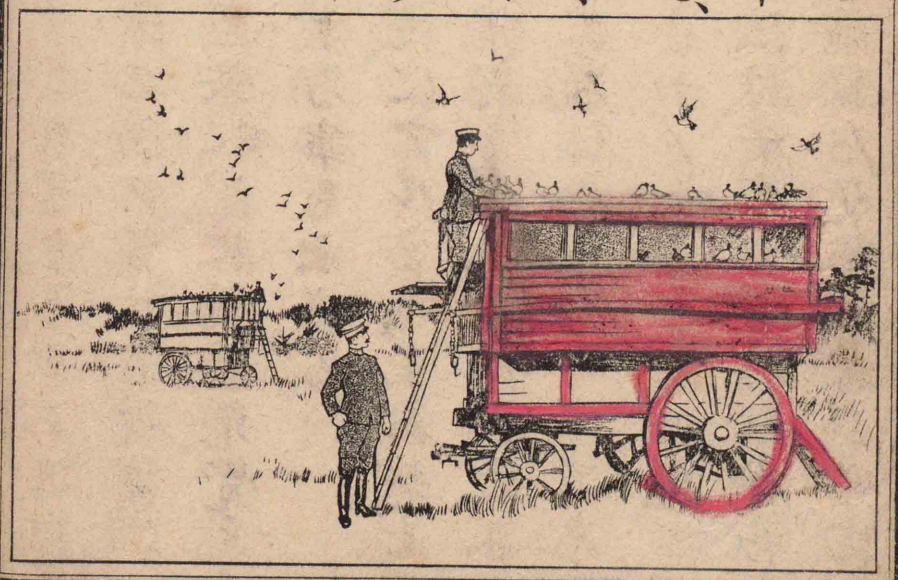
つた。ところが、先年の歐洲大戰で、やはり此のやさしい、しかも勇ましい通信者の働の偉大な事が證明せられたので、今では各國共に盛に傳書鳩の改良に力を用ひ、其の飼養を奬勵してゐる。

鳩は餘程遠い處で放しても、正しく方向を判定して、矢のやうに自分の巣に飛歸る。それ故鳩の體に手紙を附けて放せば、容易に通信が出來るのである。

普通傳書鳩を使用する方法は、一定の飼養所から他の土地に連れて行つて、飛歸らせるのである。し

豫

かし此の外に、往復通信の方法もある。それは、豫め甲乙の二地をきめて置いて、一方を飼養所、一方を食事所とし、飼養所から食事所へ通つて食物を取るやうに馴らして、其の往來を利用するのである。鳩は一分間に約一キロメートルも飛ぶ力があるから、四五十



飛移其處覺

獲路

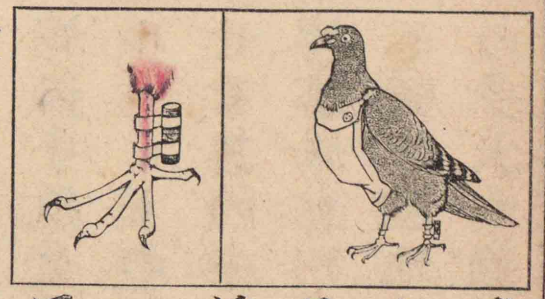
キロメートルの處を往復して食事するぐらゐは何でも無い。又暗い時の飛行に馴れさせて、夜間に使ふ事も出來るし、飼養所を移動し、其處を見覺えさせて飛歸らせるやうにする事も出來る。

鳩に手紙を運ばせるには、足にアルミニュームかセルロイドの細いくだを附け、又は胸に袋を掛けさせて、其の中に入れるのである。

傳書鳩を利用する場合はなかなか多い。飛行機の不時着陸地點を知らせたり、漁業者が沖から獲物の多少や難船の有樣を通知したり、登山者が路に

援

畫



迷つて危険におちいつた時、救を求めたり、いろ〳〵に利用する事が出來る。又戰爭の時戰線から戰狀を報じたり、援兵を賴んだりするに使ふのも其の一つである。殊に要塞が敵にかこまれて、無線電信機は破壞せられ、傳令使は途中で要擊せられ、全く方法の盡きた場合などには、此の勇ましい小傳令使にたよるより外はない。「あゝ、あのかはいゝ鳩が、一度任務を命ぜられると、勇ましく高空に輪を畫がきながら、しかと方向を

的

僧

門

留守

見定め、矢のやうに目的地へ向つて飛んで行くのを見たならば、何人も其のかしこさと勇ましさに感心しない者はあるまい。

第十二　鉢の木

雪の日の夕暮に近き頃、上州佐野の里に、つかれし足の歩重くたどり着きたる旅僧あり。とあるあばら家の門口に杖を止めて、一夜の宿を貸し給へとこへば、身なりはそまつなれど氣品高き婦人立出でて、

「折あしく主人が留守でございますので。」

迎榮

とことわりぬ。されど婦人は、氣の毒とや思ひけん、僧をば待たせ置き、おのれは主人を迎へにとて外に出行きけり。

折から、たもとの雪を打拂ひ〳〵つゝ、此方へ來かかれるは、此の家の主人なるべし。

「おゝ、降つたは〳〵。世に榮えてゐる人がながめたらさぞ面白い事であらうが。」

感がいに打沈みてとぼ〳〵と歩を運ぶ。ふと我が妻を見つけて、

「此の大雪にどうして出かけたのか。」

宿泊

「旅僧が一夜の宿を賴むとおほせられて、あなたのお歸を待つていらつしやいます。」

主人は急ぎて家に歸りぬ。

僧は改めて主人に一宿をこへり。されど主人は、

「御覽の通りの見苦しさ、お氣の毒ながら、とてもお泊め申す事は出來ません。此處から十八町程先に、山本といふ宿場があります。日の暮れない中に、一足も早くお出かけなさい。」

といふに、僧は返す言葉もなくて出行きぬ。

すご〳〵と立去る僧の後影を見送りたる妻は、や

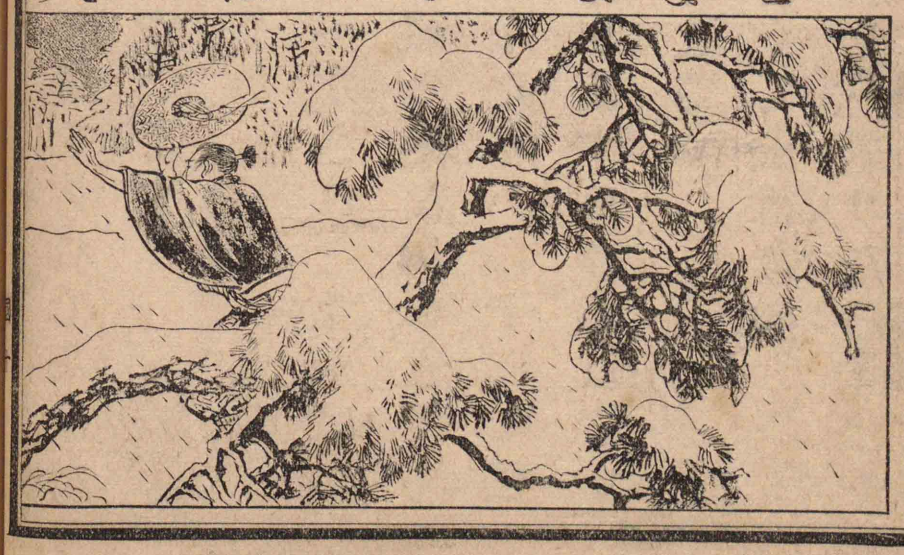
がて夫に向ひて、

「あゝ、おいたはしいお姿。とても明るいうちに山本まではお着きになれますまい。

お泊め申してはいかゞでございませう。」

同情深き妻の言葉に、主人はいたく心動きて、

「ではお泊め申さう。此の大



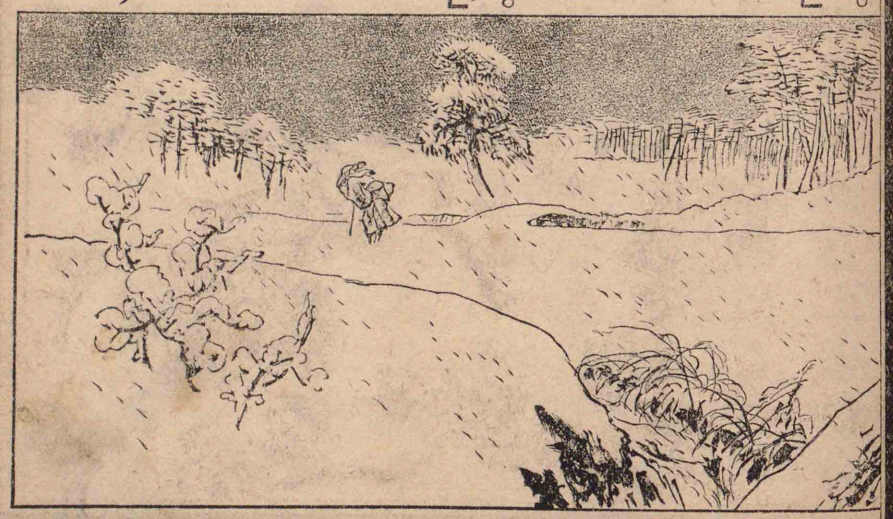
失

雪、まだ遠くは行かれまい。」

主人は僧の後を追ひて外に出でぬ。

「なうく、旅のお方、おもどり下さい。お宿致しませう。」

主人は聲を限りに呼べど、はるかに行過ぎたる僧は、聞えぬにや、ふりかへらず。降積む雪に道を失ひ、進みもやらずたゝずみたる樣は、古歌に



駒とめて袖打拂ふかげもなし、
佐野のわたりの雪の夕暮。

といへるにも似たりけり。

からうじて僧をともなひ歸れる主人は、物かげに妻を呼びて、

「お連れ申しはしたが、差上げる物はあらうか。」

「粟飯ならございますが。」

主人はうちうなづきて出來り、僧に向ひて、

「お宿は致しても、さて何も差上げる物はございません。ちやうど有合はせの粟の飯、召上るなら

圍坐

と妻が申してをりますが、いかゞでございませう。」

「それはけつこう、頂きませう。」

やがて運び來れる貧しき膳に向ひ、僧は喜びて箸を取りぬ。

三人はゐろりを圍みて坐せり。ゐろりの火は次第におとろへ行きて、ひまもる夜風はだへをさすが如し。

「だん〳〵寒くなつて來たが、あやにく薪も盡きてしまつた。

梅

さうだく。あの鉢の木をたいて、せめてものおもてなしにしよう。」

とて主人の持來れるは、秘藏の梅・松・櫻の鉢植なり。

僧は驚きて、

「お志は有難いが、そんなりつぱな鉢の木をたくのは、どうぞ止めて下さい。」

「私はもと鉢の木がすきで、いろく集めた事もありましたが、かう落ちぶれては、それも無用の物好と思ひ、大てい人にやつてしまひました。しかし此の三本だけは、其の頃のかたみとして、大

失

切に殘して置いたのでございますが、今夜は之をたいて、あなたのおもてなしに致しませう。」

主人は三本の鉢の木を切りてゐろりにたきぬ。僧は其の厚意を深く謝し、さて

「失禮ながらお名前を聞かせて頂きたい。」

「いや、名前を申し上げる程の者ではございません。」

主人はけんそんして言はず。僧は重ねて

「お見受け申す所、たゞのお方とも思はれません。是非お明かし下さい。」

郷奪末

長刀

「それ程おつしやるなら、恥づかしながら申し上げませう。佐野源左衛門常世と申して、もとは佐野三十餘郷の領主、それが一族どもに所領を奪はれて、此の通りの始末でございます。」

といひて目をふせしが、主人はやがて語氣を改めて、

「かやうに落ちぶれてはゐるものの、御らん下さい、これに具足一領、長刀一ふり、又あれには馬を一匹つないでもつてをります。唯今にも鎌倉の御大事といふ時は、ちぎれたりとも、此の具足に

空

暇

身を固め、さびたりとも長刀を持ち、やせたりともあの馬にうち乗つて一番にはせ參じ、眞先かけて敵の大軍に割つて入り、これぞと思ふ敵と打合つて、あつぱれてがらを立てるかくごでしかし此のまゝに日を送つては、唯空しくうゑ死する外はございません。」

一語々々、心の底よりほどばしり出づる主人の物語に、いたく動かされたる旅僧は、兩眼に涙をたゝへて聞きゐたり。

翌朝僧は暇をこひて又行くへ知らぬ旅に出でん

留

沙汰

とす。始は身の上をつゝみ、貧の恥をつゝまんとして宿をことわりし常世も、一夜の物語にうちとけては、名殘なか〳〵盡きず。今一日留り給へとすゝめて止まざりき。旅僧もまた主人夫婦の情心にしみて、そゞろに別れがたき思あり。されどかくて何時まで留るべき身ぞと、心強くも立去りけり。

降積みし雪もあと無くきえて、山河草木喜にあふるゝ春とはなれり。頃しも鎌倉より、勢ぞろへの沙汰俄に國々に傳はりぬ。常世は、時こそ來れと、やせ馬にむちうつてはせつけたり。やがて命ありて御

上

汝

寒

前に召されぬ。諸國の大名小名きら星の如く並べる中に、常世はちぎれたる具足を着け、さび長刀を横たへ、わるびれたる樣もなく、進みて御前にかしこまれば、最明寺入道時頼はるかの上座より、

「それなるは佐野源左衛門常世か。これは何時ぞやの大雪に宿を借りた旅僧であるぞ。其の時の言葉にたがはず、眞先かけて參つたは感心の至りさて一族どもに奪はれた佐野三十餘郷は、理非明らかなるによつて汝に返しあたへる。又寒夜に秘藏の鉢の木を切つてたいた志は、何より

授

侍訴訟斷

もうれしく思ふぞ。其の返禮として加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松井田、合はせて三箇所の地を汝に授ける。」

時頼は尚一同に向ひて、

「今度の勢ぞろへに集つた諸侍の中に、訴訟ある者は申し出るがよい。理非を正して裁斷致すであらう。」

一同謹んで承る中に、常世は有難さ身にしみ、喜にみちて御前を退きけりとぞ。

第十三　京城の友から

國十

京

街

しばらく御無沙汰致しました。皆様御かはりはありませんか。こちらも一同無事です。何時か御約束した通り、今日は當地の様子を少しばかり申し上げます。

汽車で京城へ來る人は通常京城驛で下りるのです。此の停車場を出て大通を東北に進むと、二町ばかりで大きな門の前へ出ます。此の門が南大門です。京城の市街は、もと石でたゝんだ高い城壁で圍まれ、その處々にかういふ門があつて、出入

留

天照大神

口になつてゐたのださうです。今でも城壁は大部分昔の面影を留めてゐますし、門も主なものは殘つてゐます。南大門通から本町通・黄金町通・鍾路通にかけての一帶が、京城での一番にぎやかな處です。」

驛の東の方に南山といふ山があつて、其の一部が公園になつてゐます。此處には天照大神と明治天皇とをおまつりした朝鮮神宮があります。

僕はもう南山へ何度も上りましたが、此

宮

構

府

處からは京城の市街がまるで繪のやうに見えます。市街の周圍を取圍んだ山々は地はだが白く、それに松がまばらに生えてゐます。南山と向ひ合つて北岳といふ山がありますが、其のすそには、松林を後にして右に昌德宮、左に景福宮の壯大な構があります。此の附近には一帶に朝鮮家屋があり、景福宮の構内には新築の朝鮮總督府が見えます。其の手前には德壽宮、なほ手前には公會堂・朝鮮ホテル・朝

館　煉瓦　展

鮮銀行・郵便局などのりつぱな洋館がそびえてゐます。少しはなれて、右の方の小高い岡の上に天主教會堂がそびえて見えます。すみきつた空氣の中に煉瓦の赤色や、松の緑色などが鮮かに浮出して見えるのは實にきれいです。

京城の西南部に龍山といふ處があります。龍山はもと漢江にのぞんだ小さな町であつたが、京城の發展するに連れて次第に廣がり、兩方が町續きになつて、今では

編

は龍山も京城の中に編入されたのださうです。此處には軍司令部や龍山停車場などがあります。

こちらへ來てもう三月餘りになりますが、よくも續くと思ふくらゐの天氣續きで、雨といふものはごくたまにしか降りません。殊に秋晴の美しさはかくべつで、遠足好きの君なら、毎日何處へか出かけたくてたまらないだらうと思ひました。

此の頃は大分寒くなつて、朝は攝氏零度

則替

以下何度といふきびしさ、學校へ行く途中などは、寒いといふよりもいたいやうに感じます。面白いのは、三日四日續いて寒ければ、其の次には又其のくらゐの間暖さが續くといふやうに、寒さと暖さがほとんど規則正しく交替することです。こちらでは昔から之を三寒四温といつてゐるさうです。

お知らせしたい事はまだいろ〳〵ありますが、大分長くなりましたから、今日は

炭降圖

此のくらゐにして置きます。どうか御兩親様によろしく。おついでに野田君や山口君にもよろしく。

十二月十八日　　原　安雄

水野竹次郎君

第十四　炭坑

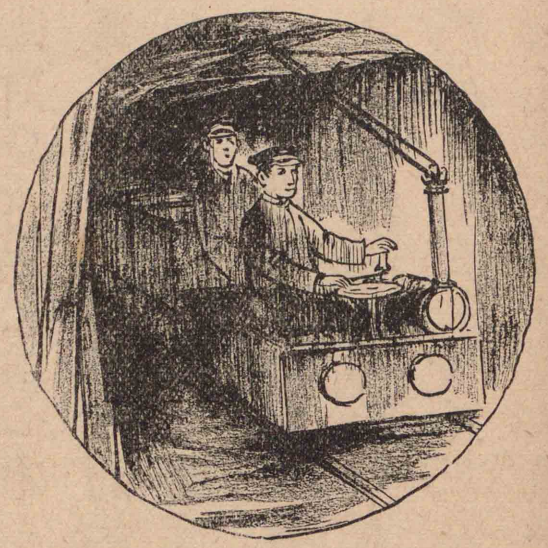
此の間、九州三池の或炭坑（かう）を見物しました。事務所で坑内服に着かへ、安全燈を持つて、案内の事務員と一所に昇降（しよう）器に乗りました。合圖のかねが鳴るとすぐ動き出す。地下水のしづくが、四方か

往

ら雨のやうに落ちて來る。昇降器がすさまじい勢で下りて行くので、目がまはりさうです。安全燈の取手を握りしめて、じつと目をつぶつてゐるうちに、何時の間にか、地下九百尺の坑底に着きました。昇降器を下りて、あたりを見まはすと、周圍の壁は皆石炭で、それが電燈の光に物すごく光つてゐます。此處から方々へ坑道が通じてゐて、廣い坑道には、電氣機關車が炭車を引いて往つたり來たりしてゐます。

坑道を少し行つて、ポンプ室の前に出ました。室の

備



中には、大きなポンプが幾つも、すさまじい勢で活動してゐます。これは炭坑内の地下水を坑外へ汲出す爲で、こんな大きなポンプを備へ附けてゐる處は、世界でも珍しいさうです。

ポンプ室を出てから小道へはいりました。此處は電燈も無いので、眞暗です。安全燈をたよりに歩いて行くと、不意に足もとからねずみが一匹飛出し

思

ました。はつと思つて立止ると又一匹。事務員は平氣で、

「坑内には、ねずみがたくさん居て困ります。」

と言つて笑ひました。

其のうちに馬屋の前に出ました。二三十匹の馬がまぐさを食つてゐます。坑内に馬が居るのは不思議だと思つて、聞いてみると、これは石炭を運ぶために飼はれてゐるのださうです。

馬屋の前を通つてだん〳〵奥深く進むと、いよいよ石炭を掘つてゐる處へ來ました。つるはしの音

崩

がこつつり〳〵聞える。暗やみの中にかすかに安全燈が光つてゐる。近づいて見ると、坑夫が汗だらけになつて、元氣よく石炭を掘つてゐます。つるはしの先がきらりと光る。石炭ががさりと崩れる。又つるはしをふり上げる。石炭の壁は安全燈の光に照らされて、

採

姓

燃

黒光りに光つてゐます。採炭坑夫は四人づつ一組になつてゐて、其の内の二人が石炭を掘崩すと、他の二人がそれをざるで運んで炭車に入れる。炭車が一ぱいになると、馬方がそれを馬に引かせて、電氣機關車の通ふ道まで運んで行きます。

歸途、事務員は次のやうな事を話してくれました。

「今から四百年許前の事ださうです。或日、此の附近の山へ薪をとりに來た百姓が、たき火をしてゐると、そばの黒い岩に火がつき、煙をあげて燃出しました。驚いて調べてみると、あたりは同じ

更

眞黒な岩ばかりでした。それから『燃える石』といふひやうばんが高くなつて、附近の村々では之をとつて薪の代りに使ふやうになりました。これがつまり此の炭坑の始ださうです。」

坑外に出ると、急に夜が明けたやうで、日光の有難さをしみ〴〵感じると共に、あの坑内でたえず活動してゐる坑夫の仕事を、たふといものに思ひました。事務所の湯にはいつて服を改めると、更に生きかへつたやうな氣持がしました。

第十五　輸出入

羊

我々が今日生活して行くには、我が國で出來る品物ばかりでは用が足りない。又國内で出來るものを使ふよりも、時には外國の品を使ふ方が都合のよい事もある。種々の品物が遠く外國から輸入せられるのは、主にこれ等の事情からである。

米は我が國でずゐぶん多くとれるが、全く外國の米の足しまへを受けぬわけには行かない。それで、印度支那半島あたりから年々輸入してゐる。又毛織物の原料になる羊毛は、我が國ではほとんど産しないから、オーストラリヤなどから輸入する。機械

重

類は、近年我が國でも盛に製造されるやうになったが、物によつては、やはり外國の品を買つた方が得な場合が少くない。それで、機械類もまだかなり多く輸入されてゐる。

我が國は種々の品物を輸入してゐるばかりでなく、國内で出來た物を外國へ輸出することもなかなか多い。輸出品の主な物は、生絲・綿織物・羽二重・縮緬・精糖・陶磁器などで、輸出先はアメリカ合衆國・支那・印度等である。

又外國から原料を輸入し、それに加工して、更に外

豚　額　印

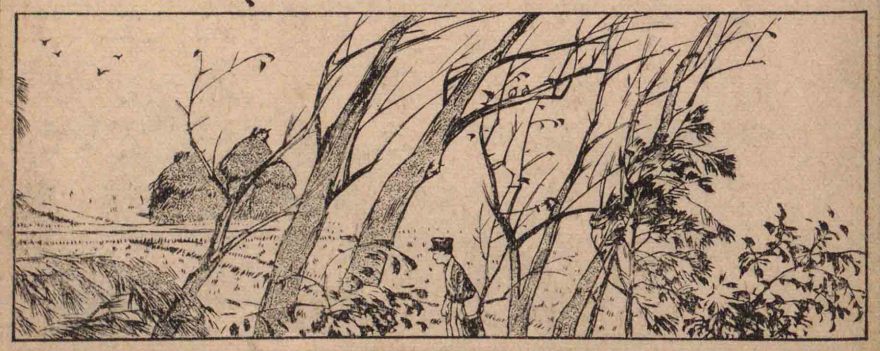
國へ輸出する事も少くない。繰綿は主に印度やアメリカ合衆國から輸入し、それに加工して綿絲や綿織物を造ります。これらの製品は我々の使ひ料にもなりますが、又支那・印度其の他の東洋諸國へ輸出されます。支那の豚の毛が輸入されて日本でブラシに造られ、又支那へ輸出されるなども同じ例であります。最近における我が國の輸出入總額は數十億圓の多額で、之を十年前の額に比べると、ほとんど二倍であります。輸出入の額の増加して行くのは國家が次第に盛になる印であります。

登　銀

第十六　登校の道

冬の朝日のさす軒下に、
俵あむ手のいそがしげなる
父と母とに暇を告げて、
勇みて出づる我が家の門。

こずゑ明るき林を行けば、
やぶかうじの實木の根に赤く、
霜柱たつやぶかげの路、
ふめばさくさく銀みだる。

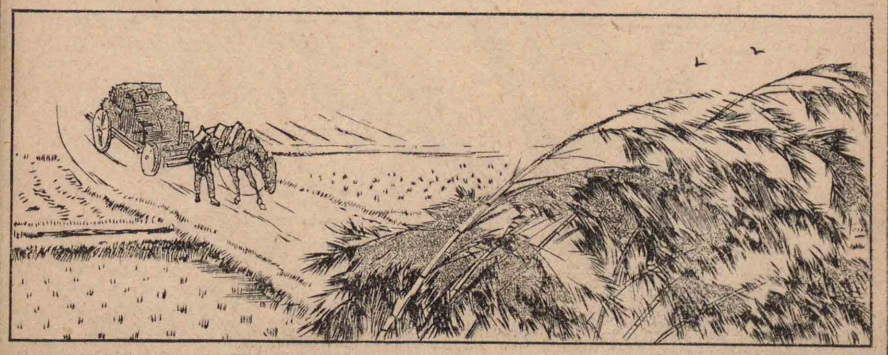


整

耕地整理のあとうつくしく、
並ぶ田の面に氷きらめき、
新道づたひ車重げに
ひき來る馬のつく息白し。

交

村の社の掃除（さうぢ）や終へし、
はうき手に〳〵此方をさして
語りつゝ來る若き人々、
今朝とく出でし兄も交れり。



第十七　言ひにくい言葉

ナマムギナガゴメナガタマゴ。
ナマムギナマモメナマタマゴ。

幾度もくりかへしてゐる中に、太郎は
生麥生米生卵。
と、早口にすら〳〵言へるやうになつた。太郎は得
意になつて、
「おとうさん、こんなに言ひにくい言葉は外に無
いでせう。」
といふと、父はにこ〳〵笑ひながら、

『おとうさんは、もつと言ひにくい言葉を知つてゐる。』

「何といふ言葉ですか。」

『ばい。といふ言葉と『いゝえ。といふ言葉だ。』

『ばい。』『いゝえ。』大變やさしい言葉ではありませんか。どうしてそんなに言ひにくいのです。」

父は

「誠にやさしいやうだが、それで中々言ひにくい場合があるのだ。」

翌日太郎が友だちの正雄・良一と三人連で、學校から歸る時の事であつた。「本道は遠いから近道を通らう。」と正雄が言ふと、良一はすぐ賛成した。其の近道といふのは田のあぜ道で、途中にはかなり深い小川にかけ渡した一本橋がある。太郎は前から父に「あの橋は危險だから決して渡つてはならぬ。」と固く禁ぜられてゐたのであるが、友だちのすゝめをことわりかねて、一所に渡り出した。すると橋はまん中から折れて、三人は水中におちいつた。さいはひ附近の田で働いてゐた村の人々に助けられ、何れもぬれねずみのやうになつて家に歸つた。

父は

「お前はどうしたのだ。かねてあぶないといつて置いた、あの橋を渡つたのでは無いか。」

とたづねたが、太郎はだまつてゐた。

其の夜又父に強く聞きたゞされて、太郎はやつと今日の次第を有りのまゝに話した。父は

「なぜ其の時『いゝえ、僕は止められてゐるから渡りません。』と、きつぱりことわらなかつたのか。」

「僕は再三ことわつたのです。すると、しまひに皆が僕の事を弱蟲だといつて笑ひました。僕は殘

念でたまらなくなつたので、何此のくらゐの事がこはいものかと、自分から先に立つて渡つたのです。」

「成程弱蟲だ。人の言ふことに對して『いゝえ』と言切るには、ほんたうの勇氣がいる。お前のやうな弱蟲には、ひよつとすると命を失ふやうなあぶない時でも、言出すことの出來ない程『いゝえ』といふ言葉は言ひにくいのだ。

それから又、晝間私が聞いた時、なぜすなほに『はい』といはなかつたのだ。」

悔　亡

『僕何だかきまりが惡くつて、さう言へなかつたのです。』

「それ御らん。『はい。』も言ひにくい言葉では無いか。」

太郎はつくづくと自分の惡かつた事を後悔すると共に「はい。」と「いゝえ。」の言ひにくいわけをさとることが出來た。

第十八　文天祥

支那の宋朝の末、北方に元といふ國おこり、勢日々に盛にして、宋の領地をかしかば、宋は次第におとろへて、ほとんど亡びんとするに至れり。

羊虎　敗兄　以

宋の臣文天祥大いに之をうれへ、義兵を集めて國難を救はんとす。其の友之を止めていはく、「羊の虎に向ふが如し。危し。」と。天祥きかずしていはく、「我もとより之を知る。唯國家の危きを如何せん。」と。出でて元軍に當る。

然るに元軍の勢いよ〳〵盛にして、宋軍到る處に敗れ、皇帝皇后も遂に敵手に落ちぬ。こゝにおいて皇兄位をつぐ。文天祥命を奉じ、各地に轉戰して元軍を破る。されど宋軍の大勢日々に非にして、天祥の誠忠を以てしても如何ともすることあたはず。

捕降

たまく元の大軍至るに及んで天祥大いに敗れ、遂に敵兵に捕へらる。

時に宋の勇將張世傑よく戰ひて元軍を防ぐ。敵將張弘範如何にもして之を降らしめんとし、文天祥に命じていはく、「書をしたゝめて張世傑を招け」と。天祥固くこばみていはく、「我、國を救ふことあたはず、いづくんぞ人をいざなひてそむかしめんや」と。張世傑等の奮戰も大勢を轉ずることあたはずして、宋遂に亡びしかば、張弘範、文天祥に説きていはく、「宋亡びぬ。御身の忠義を盡くすべき所なし。今より心を改めて元に仕へば、富貴は意の如くならん」。

富

病効治

と。天祥きかず。或人又なじりていはく、「汝大勢の如何ともすべからざるを知つて、何ぞいたづらに苦しむことの甚だしきや」と。天祥いはく、「父母の病あつければ、醫藥の効なきを知りても、尚治療につとむるは人情の常にあらずや。心力を盡くしてしかも救ふことあたはざるは天命なり。事既にこゝに至る。天祥唯死せんのみ」と。遂に獄に投ぜらる。

元の皇帝深く文天祥を惜しみ、ねんごろに諭して元に仕へしめんとす。天祥いはく、「我は宋の臣なり。

いづくんぞ二朝に仕へんや。願はくは我に死をたまへ」と。帝其の志の動かすべからざるを知り、之を刑場に送らしむ。天祥刑せらるゝにのぞみ、従容としていはく、「臣が事終る」と。うやゝしく南宋の方を拜して死す。

元帝歎じていはく、「文天祥は眞の男子なり」と。

第十九　温室の中

寒い北風に吹かれながら、冬枯の小道を通つて來て、一足温室の中にはいると、全く別の世界に來たやうな心持がする。とりぐの花の色、むせ返るや

香

うな強い香、ぽうつと身に感じる暖さ、ガラス屋根を通して來るやはらかい日の光、まるで春の國に居るやうだ。先に立つたにいさんが、

「あゝ、咲いてゐる、くゝ。みよ子、ずゐぶん珍しい花があるだらう。此處は主に蘭の類を集めてある處だ。熱帶地方から持つて來たのだから、かうして年中六七十度以上の暖さの處に置かなければいけないのだ。」

と、いろく説明して下さる。たくさん咲いてゐる中で一番美しいのは、たれ下つた莖に、幾つも咲い

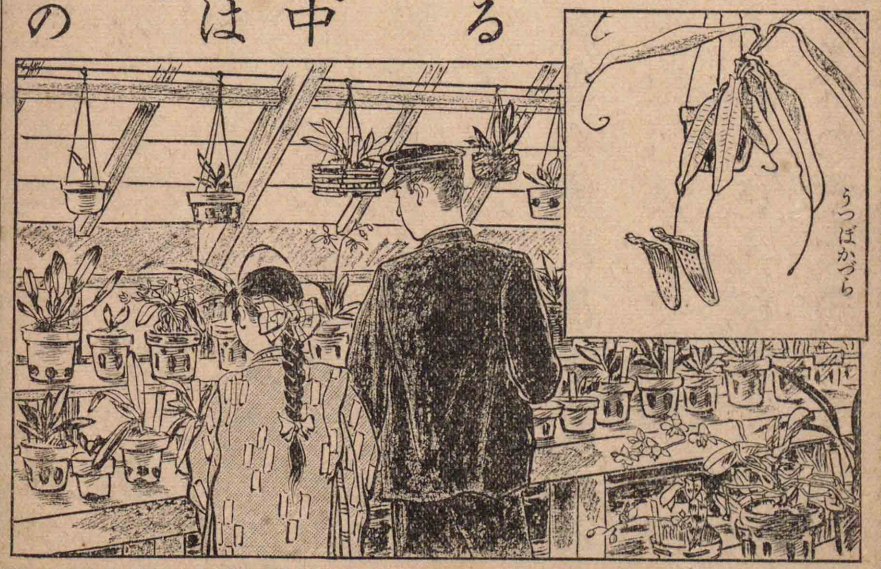
薄

てゐる薄紅色の花である。それから少し行くと、うつぼかづらといふものがある。葉の先からつるを出して、五六寸の細長い袋をつるしてゐる。

「此の袋で蟲をとるのだ。中をのぞいて御らん、何かはいつてゐるやうだから。」

とおつしやるから、そつとのぞいて見るとはへのやうな蟲が二匹、底の水の中で、動けなくなつてゐる。ほんたうに不思議な草だ。

「さあ、今度は葉のきれいな植物を集めてある處だ。」



絹

群

といつて、にいさんは次の室へ案内して下さる。成程、緑色の絹絲で作つたのかと思はれるやうな葉もあれば、赤や黄や青や紫のまだらの美しいのもある。中には、まるで花かと思はれる紅色の葉が、莖の上の方に群がつて出てゐるものもある。

建物は此處から右に折れる。次の室には大きい熱

管暖

帶植物類が並んでゐる。椰子・バナヽ・コーヒー・ゴムの木などは名を聞いてゐたが、實物を見るのは始めてである。にいさんは

「此の後にかまがある。其處から熱い湯を管で各室へ送つて、適當に暖めるやうになつてゐるのだ。」

と教へて下さつた。

其處から又右に折れると、細長い室一ぱいに、目もさめるやうな草花が並べてある。にほひのよいのや、色の美しいのや、形のかはいらしいのや、どれを

髮

見てもどれを見ても、一枝髮にさしてみたい。にいさんも足を止めて、

『どうだ、美しいだらう。此の温室は南を受けてゐる上に、十分熱い湯が通つてゐるから、こんなに早く咲くのだ。一度此の中にはいると、また寒い處へ出るのがいやになるね。』

とお笑ひになつた。外はさつきよりも一そう風が強くなつたのか、ガラス越しに見える向ふの木がひどくゆれる。其の枝の先にしよんぼりと止つてゐる烏の姿も、見るから寒さうだ。

障

第二十　手紙

一

御手紙有難く拜見致し候。寒さきびしき折から皆様には御障もなく、御前様にも日々學校に御通ひなされ候由、安心致し候。さて御父上様の御葉書ならびに御前様の御手紙により、御母上様には去る二日御安産にて、玉の様なる女の御子御生れの由承り、誠にめでたくうれしき限りと存じ候。男ばかりの御兄弟の中に、此の

度始めて妹を得られ候事、御前様の御喜さぞかしと察し申し候。私とてもかはゆらしきめひの生れ候と聞きては、何よりうれしく、一日も早く御顔を見たく存じ候。御名は何と付けられ候や、これも早く承りたく、御知らせ待ち上げ候。御母上様はまだ御やすみにて、御前様には御家事御手つだひのため、何かと御いそがしき事と察し申し候。近き處ならば早速上り候て御世話も致すべく候へども、何分百

任粗縫

里の山川をへだてたる事とて、それも心に任せず、甚だ残念に存じ居り候。今日小包にて粗末なる物、赤さんの御着物にも と御送り致し候間、御前様御ひまの折、裁縫のおけいこに御仕立て下されたく候。皆様へよろしく御傳へ下されたく願ひ上げ候。かしこ。

二月五日　叔母より

さち子どの

二

夢悲

承り候へば、御祖母様には先日より御病氣の處、御養生のかひもなく、去る十九日遂に御死去遊ばされ候由、誠に驚き入り候。平生甚だ御達者にて、近來は殊に御元氣のやうに承り居り候事とて、此の度の御報は全く夢かと存ぜられ候。大兄をはじめ皆様方の御悲歎、如何ばかりかと御察し申し上げ候。當地に御住まひの頃度度參上致し、大兄と共にいろ〳〵御話を承り候事など、今更のやうに思ひ出され

悔　好　佛

候。両親も非常に驚き居り、あつく御悔申し上げ候やうにと申し出で候。尚御生前御好物なりしやうかん一折、小包便にて御送り申し上げ候間、御佛前へ御供へ下されたく候。先は右とりあへず御悔申し上げ候。

二月六日　　小林梅吉

大森　茂様

第二十一　日光山

二荒(ふたら)の山もと　木深き處、

振　巧　丹　美術

大谷(だいや)の奔(ほん)流　岩打つほとり、
金銀珠玉を　ちりばめなして、
ひねもす見れども　あかざる宮居。

浮きぼり・毛ぼりの　柱にけたに、
振るひしのみのて　巧をきはめ、
丹青まばゆき　格天井(がうてんじやう)に、
心をこめたる　繪筆ぞにほふ。

美術の光の

かゞやく此の地、

日本

山皆緑に
樂園日本の
とつ國人さへ
水また清く、
たへなる花と、
めづるもうべぞ。

第二十二　捕鯨船

隻捕鯨

昨夜の風雨は名残なくをさまつたが、海面にはまだ波のうねりが高い。一隻の捕鯨船が、勇ましく波を切つて進んで行く。マストの上の見張人が不意に

「鯨、鯨。」

と聲高く叫んで、北の方を指さした。

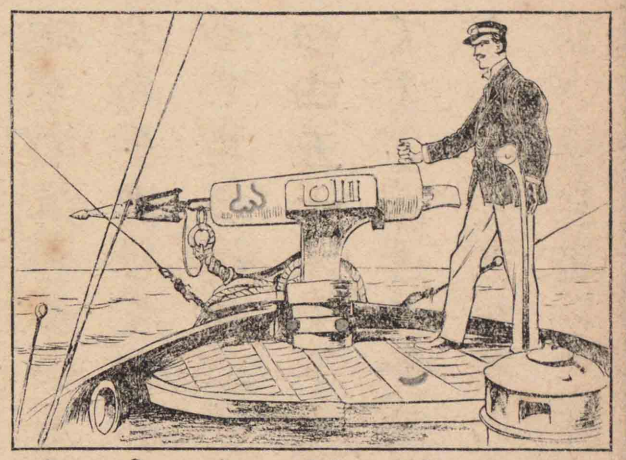
裂

甲板に立つてゐた船長を始め十人許の乗組員は、ひとしく目を其の方向に向けた。はるかのあなたに白い水煙が見える。

砲手の落ちついた力のこもつた號令に、船ははや方向を轉じた。砲手は此の時早く船首の砲後に立つて、其の引金に手をかけた。右に左に鯨を追ひつつ四五十メートルまで近づいた時、ねらひを定めて、ずどんと一發、破裂矢をしかけたもりを打つ。もうもうと立ちこめる白煙の間から見ると、すさまじい波を起して、鯨は海底深く沈んだ。

歡呼

彼方



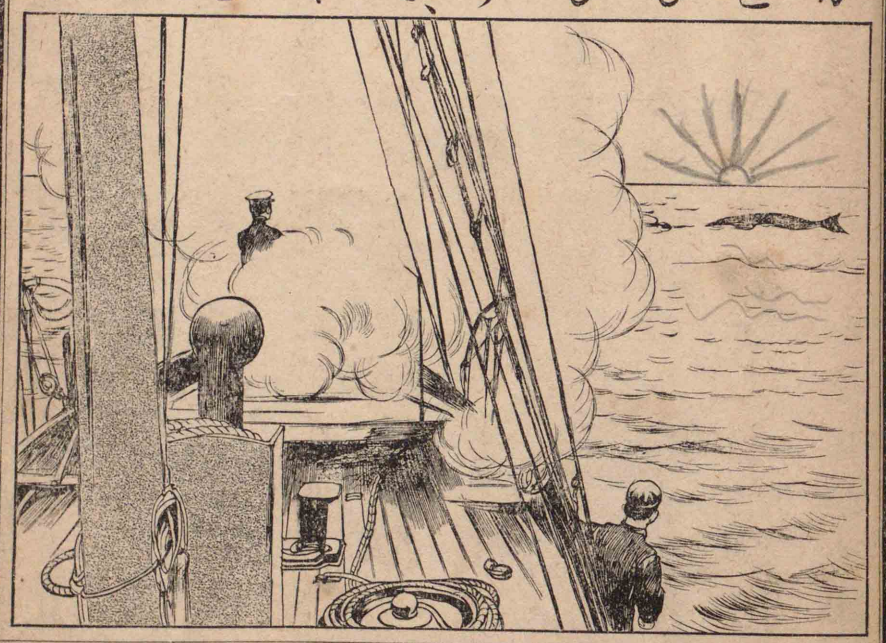
「命中、々々。」

一同は歡呼の聲をあげた。もりが體内深くくひ込んで、破裂矢が見事に破裂したのであらう。もりにつけた長い綱はぐんぐん引張られて、三百メートル許もくり出された。

やがて鯨は再びはるか彼方に浮上つた。今まで勢よく引出されてゐた綱もやゝゆるんで來た。綱を次第々々にくりもどすと、鯨は刻一刻船に近よつ

巻

て來る。しかしまだなかなか勢が強いので、綱を巻いてはのばし、のばしては巻いて、氣長くあしらつてゐるうちに、さすがの鯨も次第に弱つて、船から五十メートルぐらゐの處まで引寄せられた。其の時、二番もりが打出された。二十メートル



ルもある大鯨が今は全く息たえて、小山のやうな體を水面に横たへる。あたりには流れ出る血に、紅の波がたゞよふ。

「萬歳、々々。」

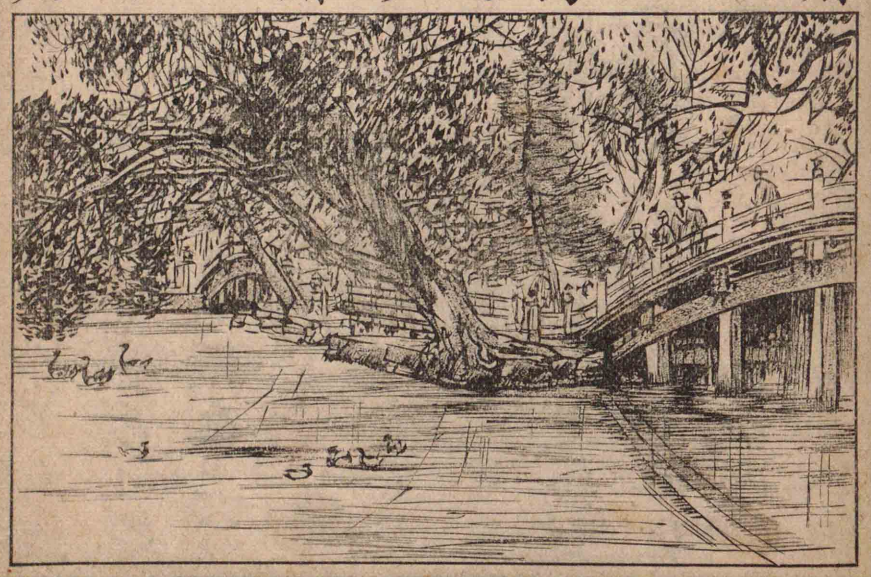
船員は手早く鯨の尾をくさりで船ばたにつないで、威勢よく根據地に引上げる。

第二十三　太宰府まうで

汽車で二日市驛に着いたのは午前の九時、少し歩いて太宰府行の電車に乗つた。まだ芽の出ないはぜの木の間を通り、霜の眞白に置いた田の中を走

る。間もなく電車は太宰府町に着いた。

太宰府町は太宰府神社のある處である。青銅の大鳥居をくゞつて進むと、沿道の家は大てい天滿宮にちなんだ物を賣つてゐる。間もなく神社の廣い境内にはいつた。何百年も經たであらうと思はれる樟の大



馬　拜　鏡　墓　梅　紅

木が茂り合つてゐる。池にかけてある二つの太鼓橋を渡り、繪馬堂の前を通つて樓門をくゞると、本殿の前に出る。うやゝしく拜んでさて頭を上げると、神前の大きな神鏡が、きらゝとかゞやいてゐて神々しい。此の神社は菅公の御墓所に建てたものだと聞いて、一層感を深くした。

社殿の後に廻ると、其處は廣々とした梅林で、幾百本とも知れない古木の梅が咲續いてゐる。白梅は今ちやうど眞盛りであるが、其の間に咲きかけの紅梅が點々と交つて美しい。掛茶屋に休んで名物の餅を食べてゐると、不意にかん高い鳥の聲が聞えた。茶屋のおばあさんに尋ねると、それは園内に飼つてある鶴の聲であつた。

尋　跡

歸りは二日市まで歩くことにした。地圖を便りにして進んで行くと、山畑の其處此處に野梅の咲きこぼれてゐるのも面白く、霜よけのわらの間から、黄色い夏みかんがちらゝ見えてゐるのも珍しい。途中、太宰府といふ昔の役所の跡などを見て、榎寺といふ處に立寄つた。此處は菅公配所の跡である。低いじめゝしした松林の中に小さな社がある。

詩

公は此處にうつされてから一歩も外へは出ないで、三年の歳月を送られたさうである。宮中の御宴の事を思ひ出して詩を作られたのも此處であらう。」

榎寺を出て二日市の停車場へ向つた。

冬の日はもう暮近い。あちらこちらの村々からは細い煙が立上つてゐる。停車場に着いた時は午後の五時頃であつた。

紙歴

第二十四　たしかな保證

外國の或商會で、新聞紙に店員入用の廣告を出した。申し込んで來た者は五十人許もあつて、中には知名の人の紹介（せうかい）狀を持つて來た者や、りつぱな學歴のある者もあつたのに、主人はそれ等の人々をさしおいて、或一人の青年をやとひ入れた。

後日、人が主人に向つて、どういふお見込で、あの青年をお用ひになつたのかと尋ねた。

主人は答へて、

「あの青年が私の室にはいる前、先づ着物のほこ

りを拂ひ、はいると靜かに戸をしめました。きれいずきで、つゝしみ深いことは、それでよく分りました。談話の最中に一人の老人がはいつて來ましたが、それを見るとすぐに立つて、椅子(いす)をゆづりました。人に親切なことはこれでも知れると思ひました。あいさつをしてもていねいで、少しも生意氣な風が無く、何を聞いても、一々明白に答へて、しかもよけいなことは言ひません。はきはきしてゐて、禮儀(ぎ)をわきまへてゐることも、それですつかり分りました。

床

私はわざと一さつの書物を床の上に投げて置きました。外の者は少しも氣がつかないらしかつたが、あの青年ははいるとすぐに書物を取上げて、テーブルの上に置きました。それで注意深い男だといふことを知りました。

着物は粗末ながら、さつぱりしたものを着て、齒(は)もよくみがいてゐました。又字を書く時に指先を見ると、爪はみじかく切つてゐました。外の者は着物だけは美しかつたが、爪の先は眞黒になつてゐる者が多うございました。

かういふ點から、いろ〳〵の美質をもつてゐることをよく見定めて、あの青年をやとふことにしたのです。りつぱな人の紹介狀よりも、何よりも、本人の行がたしかな保證です。」

といつた。

戶數

蠶模範

第二十五　平和なる村

我が村には戶數三百、人口千四百餘あり。全村農業を以て生計を立つ。村の財産家にて事業に熱心なる人、みづから先んじて耕作・養蠶・養雞・養魚等の模範をしめしを以て、近年は作物も改良せられ、桑

益

幸

勤續

を植ゑて蠶を飼ふ者多く、殊に一村雞を飼はざる家なし。又池沼を利用して鯉・鮒を養ふことも盛にして、大てい二年毎に之を賣るに、其の利益少しとせず。かくの如くなれば全村頗る豐にして、村民皆其の家業を樂しめり。

役場と學校とは村の中央にあり。村長は村の舊家に生れ、きはめて親切公平にして、常に力を一村の幸福の爲に盡くすが故に、深く村民に敬愛せられて、幾度の改選にも重ねて選擧せられ、既に二十餘年勤續せり。校長も着實溫厚なる人にして、生徒を

専課林營基和

愛すること子の如く、生徒も校長をしたふこと父母の如し。其の他の教員も、校長を模範として専心職務につとむるが故に、生徒は皆よく之になつきて課業にはげみ、學校を思ふ心あつく、卒業後も尚學校の門に出入することを樂しみとせり。

青年團の事業の一として、杉・檜の植林を營めり。其の利益は、大部分を學校の基本金とし、其の殘部を一村共同の有益なる事業の費用にあつる計畫なり。

萬事此の有樣なれば、一村は誠に平和にして、年を追うて其の繁榮を増すばかりなり。

榮增飾奏樂臨讀

第二十六　進水式

今日を晴と滿艦飾をほどこされたる三萬四千噸の大戰艦陸奥は、海を後にして悠然と横たはれり。果もなくすみ渡りたる大空、はなやかに流るゝ日の光、場に滿ちたる十幾萬の拜觀者の胸は、まさに始らんとする進水式の壯快なる光景を豫想して、唯をどりにをどる。

折しも起る「君が代」の奏樂。皇后陛下の臨御と共に、式は始りぬ。海軍大臣の命名書朗讀、工廠長の進水

揮作

秒

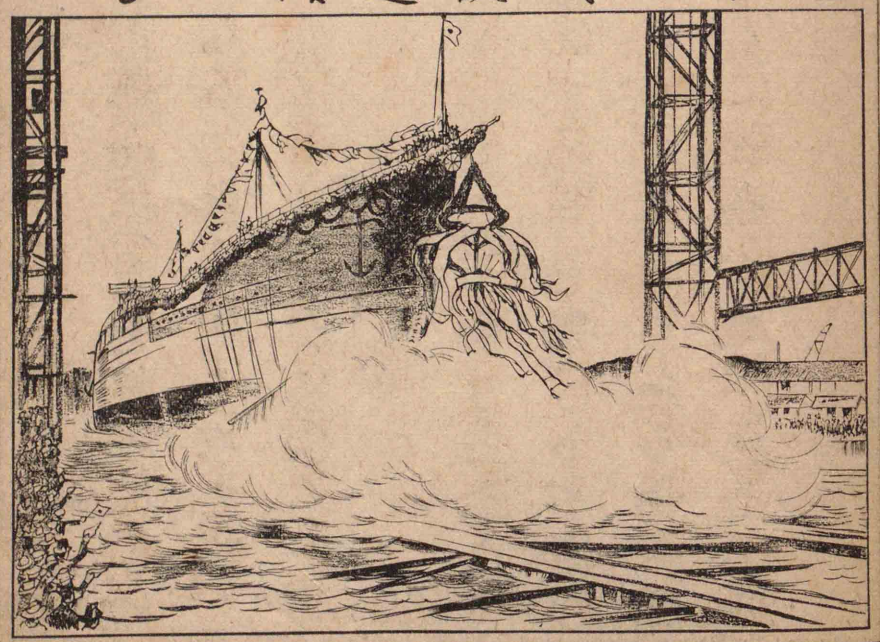
片

命令、續いて造船部長の指揮につれて吹く進水主任の號笛を合圖に、着々と進み行く進水作業。やがて工廠長のふりかざしたる金色の槌は、二年間の苦心を此の一揮にこめて、切斷臺上の繫索をはつしと切る。

拜觀者の目は、一せいに艦にそゝがれぬ。一秒又一秒、七百尺に近き大船體は、寸、尺、間と音もなくすべり出づ。艦首につるしたるくす玉ぱつとわれて、紅白の紙片花ふゞきの如くに散る中を、羽音高く舞上る數羽の鳩。

拍手かつさい、天地をとどろかす萬歲の叫、勇壯なる軍樂の調、工場といふ工場、船といふ船の汽笛が一せいにあぐる歡呼の聲。見る〳〵艦は速力を增して、白波高く海にをどり入る。

あゝ、海の戰士の勇ましき誕生。



賤　固　擧

第二十七　兒島高德

元弘二年三月、北條高時、後醍醐天皇を隱岐にうつし奉る。京中の貴賤男女此の行幸を悲しみて涙と共に見送り奉り、警固の武士もさすがによろひの袖をしぼりけり。

此の頃備前に兒島高德といふ武士あり。主上さきに笠置におはせし時早くも義兵を擧げしが、事のいまだ成らざるに先だち、笠置も落ちたる由風聞ありしかば、力なくて止みたり。然るに今主上隱岐にうつされ給ふと聞き、高德一族共を集めていへ

遲

るやう、「義を見てせざるは勇なきなり。いでや、行幸の路に待受け、君を奪ひ奉りて義軍を起さん。」と。心ある者ども何れも同意しければ、さらばとて備前と播磨との境なる舟坂山にかくれ、今かくと待ち奉れり。

行幸餘りに遲かりしかば、人をしてうかゞはしむるに、播磨の今宿といふ處より、山陰道にかゝり給ひし由なり。さらば美作の杉坂に待ち奉らんとて、けはしき山路をふみわけてたどり着きたりしに、「主上はや院庄に入らせ給ふ。」と人の言へば、衆皆力

句

まぎれて行在所の御庭にしのび入り、大いなる櫻の幹をけづりて、大文字に詩の句を書きつけたり。

天、勾踐を空しうするなかれ。
時、范蠡無きにしもあらず。

翌朝警固の武士ども之を見つけて、讀みかねて上を失ひて散り〳〵になりぬ。

高德せめては此の所存を君に知らせ奉らばやとて、夜に

顔笑越敗計故

聞に達したり。主上は詩の心を御さとりありて、顔殊にうるはしく笑ませ給ひぬ。

昔支那に呉越とて相隣れる二國ありき。年久しく相爭ひて互に勝敗ありしが、勾踐越の王となるに及び、呉の勢盛にして越軍大いに敗れ、勾踐は呉に捕へられぬ。後からうじて歸國することを得しが、勾踐此のうらみ忘れがたく、范蠡といふ忠臣の助を得て報復の計を立て、再び呉と戰ひて遂に之を亡しぬ。

高德此の故事をひきて、やがて忠臣の起りて勤王

の兵を擧げ、必ず御心を安んじ奉るべきことを聞え上げたるなりけり。

縣君　戸河内町打梨鈴政武所有甲

終

鈴

昭和四年五月二十日翻刻印刷
昭和四年六月十九日翻刻發行

尋常小學國語讀本卷十
定價金拾壹錢は

昭和四年五月廿二日
文部省檢査濟

著作權所有
著作兼發行者　文部省

翻刻發行兼印刷者　東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地　東京書籍株式會社
代表者　石川正作

印刷所　東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地　東京書籍株式會社工場

發行所　東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地　東京書籍株式會社

広島大学図書
2000301870